

2021年1月24日主日礼拝

大井バプテスト教会

説教題「届いてない叫びはない」マタイ 15章 21～28節

主任牧師 加藤 誠

「主よ、ごもつともです。しかし、小犬も主人の食卓から落ちるパン屑はいただくのです。」(マタイ福音書 15章 27節)。

聖書を読んでいるとどうしても納得できない所、腑に落ちない箇所にごち当たることがあります。わたしにとっては今日の箇所「カナンの女の信仰」もその一つです。なぜ主イエスはこれほどまでに彼女の必死の願いを冷たくあしらわれたのか。

昔から多くの人たちがいろいろな解釈をしてきました。代表的なものは「主イエスは、この時点では、まだ異邦人伝道をイスラエル国内に制限しておられた」という説です。主イエスは異邦人(異教徒)にもオープンで対等な関わりをされています。マタイ 8章でもローマの百人隊長の願いを聞き入れてその僕を癒しています。百人隊長は「主よ、わたしはあなたを自分の屋根の下にお迎えする資格はありません」と断ったにもかかわらず、主イエスは百人隊長の家に出かけていきます。主イエスには異邦人への偏見や差別が見られません。神さまの前ではイスラエル人も異邦人も愛されている神の子に変わりないと確信し行動されました。その一方で、なぜかマタイ 10章で弟子たちを福音宣教に派遣する際、「異邦人の道に行ってはならない。むしろイスラエルの失われた羊のところに行きなさい」と異邦人の地に出かけて伝道することは禁じていますので、「たぶんイスラエル国内では異邦人に伝道してもよいが、異邦人の住む地域に行ってはならない」と命じられたのだろう。そして主イエスが復活して「全世界に出て行って…」と弟子たちを世界伝道に派遣された時に、はじめて公に異邦人伝道が認められたのだ…というわけです。

けれどもマタイ 8章で、主イエスはガリラヤ湖の「向こう岸」、人々から「ケガレた地」と呼ばれていた異教徒の土地に行き、悪霊に取りつかれていた人を癒されていますし、今日のこの場面でもティルスとシドンの地方(地中海沿岸の港町で、現在のシリアにあたる)にご自分から出かけています。いったい何のためにわざわざ行かれたのか。その意図がわかりません。そこで、もう一つの解釈として「主イエスはこのとき伝道活動に疲れを覚えて、ティルスとシドンの地方にお忍びで休息に行かれたのだ。だから最初、カナン人の女性に冷たく対応されたのだ」という説が語られてきました。確かにマルコ福音書 7章の同じエピソードを紹介した箇所では、主イエスが誰にも知られたくないと思って家の中にこもっていた様子が描かれています。さすがの主イエスもさまざま癒しを願い押し寄せて来る群衆や、無理解なファリサイ派の人たちの意地悪い問答などに疲れ果てて休みたいと思われたのだろうということです。なるほど、そういうこともあっただろうとは思いますが。

けれども今朝ご一緒に読んだマタイでは、主イエスは家の中に隠れていません。人々の間に姿を現し街中を弟子たちと歩いています。わたしの中ではストーンと納得

できないのです。

それ以外には、「主イエスがここで三度も冷たくカナン人の母親の願いを拒否したのは、彼女から深い信仰を引き出すためだったのだ」という解釈も語られてきました。そういうこともあるのかもしれませんが、わたしにはあまり説得力がありません。異邦人に対して基本的にオープンで対等な姿勢を貫かれた主イエスがなぜこうまで冷たく失礼な態度を取られたのか理解できないのです。

なので、いつか神の国で主イエスにまみえた時には「イエスさま、一つ質問させてください」と直接尋ねてみたいと思っています。聖書の中でどうしても分からない、納得できないことがあるときに、疑問は疑問としてそのままにしている。ああでもない、こうでもない…と、より深く考える機会をいただいたと思えばいいし、いつか必ず神さまがほんとうの答えを教えてくださいを待とうと、楽しみに待つこともありなのかな…と思うわけです。

むしろ今朝のこの箇所注目すべきは「カナンの女のユーモアある信仰」でしょう。病の娘の癒しを心から願い、ひれ伏し懇願しているにもかかわらず、主イエスから何度冷たく拒否される。それでも最後まであきらめずに、むしろユーモアをもって切り返していく彼女の信仰には母親の愛のすごみさえ覚えます。

26 節の「子どもたちのパンを取って小犬にやっってはいけない」という言葉は異邦人の彼女にはかなり侮辱的な言葉です。「子どもたち＝イスラエル人、犬＝異邦人」という、イスラエル民族の差別的な価値観が映し出されている言葉だからです。「イエスさまの口から、そんなひどい言葉を聞くなんて。がっかりしました！」と怒りをあらわにし、そこから立ち去ってもよいくらいの言葉です。

けれども彼女は見事なユーモアをもって切り返します。「主よ、ごもつともです。しかし、小犬も主人の食卓から落ちるパン屑はいただきます」と。これは犬を飼っている人なら良く分かる言葉でしょう。「イエスさま、犬も大切な家族の一員ですよ。家族みんなで食卓につくとき、主人は犬を食卓のテーブルの下から追い出すようなことはしません。犬も主人の愛の中にいるからです。イエスさまは、そのことをよくご存知ではないですか」ということです。彼女は「主人である神さまの小犬への愛」を確信して、つまり「神さまの異邦人への変わらない愛」を確信して、真正面から主イエスに向かい合っているのです。

彼女は知っていたのでした。私たち人間には、神さまの対応が「どんなに冷たく、つれなく」思えるような時でも、神さまに「届いていない叫びはない！」ということ。

だから、私たちも祈り続けたいのです。「ほんとうに必要なことは神さま、あなたはご存知のはずです！」と。「あなたの愛を、今日、わたしに、世界中の一人ひとりに届けてください」と。神さまが見えない時、分からない時にも、このカナン人の母親の信仰をもって神さまに祈っていきたいのです。